

特集に当って

勅使河原 可海

本誌のOR学会だよりなどですでにお知らせしているように、「情報ネットワーク」の研究部会が、一昨年11月からの準備会を経て、3月より正式に発足し、活動を続けている。

「情報ネットワーク」研究部会の設立趣旨は、情報ネットワークが、企業、社会、あるいは研究のマネジメントにおよぼすインパクトや情報ネットワークをマネジメントの道具として利用するための技術などについて、技術論から文化論まで広い立場で考えていくものである。

現在、企業経営システムから社会システムに至るまで情報ネットワークなしではシステムは考えられないといっても過言ではなく、また情報ネットワークは企業戦略にとっても重要な位置づけとなっている。

情報ネットワークは、一般的なコンピュータネットワークから、人と人と結ぶヒューマンネットワークまで幅広いものが対象となり、各々の立場で捉え方が異なっていく。本研究部会では各々の立場で、また種々の視点で情報ネットワークをとらえ、情報ネットワークとその存在する環境にメスを入れ、そのメカニズムやダイナミズム等を含め実体を解明していこうとするものである。

また、情報ネットワークは、これまで技術論中心に論議されてきた傾向があるが本研究部会で文化論まで幅広く言及しようとしていることは非常に意義深いものである。

本特集では、これまでの研究部会で報告がなされたものの中からいくつかを選んで執筆をお願いしたものである。

まず、初めに情報ネットワークの代表的な例である「企業情報ネットワーク」をとりあげて舟茂弘氏に解説していただいた。情報ネットワークが全体的な構造と機能を把握し情報ネットワークの実体を理解するうえで有益である。

てしがわら よしみ 日本電気㈱ 情報処理通信システム事業部

〒108 港区芝浦2-11-5 日本電気五十嵐ビル

次に、岸本光永氏の「金融機関の国際ネットワーク」では、電子決済システム（EFT）が最も重要な課題であることを指摘し、金融機関の国際ネットワークの現状と動向をふまえて非常に鮮度の高い具体的な事例を数多く紹介していただいた。

3番目の佐々木正三氏の「セキュリティ情報ネットワーク」は、18万端末が接続している日本で最大規模のオンラインネットワークの例であり、そのネットワークは情報ネットワークに人間系であるヒューマンコントロールの機能が加わってはじめてトータルシステムとして成立つという他のネットワークにはない特異な存在である。

4番目の出口弘氏の「情報ネットワークと意味の自己組織化」は、情報ネットワークを、広域性、蓄積性、広場性を持ち、新たな意味と共通理解を創出するという共通コンテキスト形成を強力に支援することのできる情報環境としてとらえている。本論文では、情報ネットワークについて文化論まで言及しており、新しい視点を示してくれる非常にユニークな論文である。

次の渡辺慶和氏の「組織内情報ネットワークと組織のゆらぎ」では、情報ネットワークを、組織内での意識的には創り出せないインパクトや新しいアイデア、創造性を求める組織の活気を喚起させ、組織全体の新たな秩序形成へつなげるために、個々の組織構成員の「ゆらぎ」を生成させる装置としてとらえている。その概念をパソコンネットワークの具体例で説明している。

最後の論文である木嶋恭一氏の「情報ネットワーク化と経営意思決定」では、ソフトで複雑性の高い意思決定問題状況においては、システムの内部多様度を増幅し、外部多様度を削減することにより問題解決していくという多様性工学の重要な手段の1つを情報ネットワーク化ととらえている。

以上6編のうち、前半の3編は企業の実務家書いた解説的な色彩の強いものであり、具体例を通じて情報ネットワークの概観が把握できよう。一方、後半の3編は、大学の研究者が記述した情報ネットワークの新しい概念を提案するものであり、各々今後の議論の叩き台としても貴重な論文である。情報ネットワークは、システムマネジメントや待ち行列等ORの種々のテーマと密接な関係をもつものであり、会員諸氏の積極的な参加と活発な討論を期待している。